

# 貝原益軒における「民生日用」に資する学問と教育論の展開 (1)

## — 格物窮理の工夫と有用の学 —

山中 芳和

本研究は、わが国の近世において教育を人間に必須の営みとして把握するとともに、教える側の視点から、教育のあり方についての見解を具体的に展開した貝原益軒の学問と教育論の特質を、民生日用との関連において明らかにすることを目的とする。本稿ではまず初めに、益軒の教育論が展開される時代背景の特質を考察し、益軒が太平の世を肯定的にとらえる一方、世の変化と行く末をも見据えながら、人々の安定した生き方を模索したことを指摘した。次いで益軒の学問について、「格物窮理の工夫と有用の学」の視点からその特質を考察し、益軒においては実学の内実が、広く世に益となるという観点からとらえられた事により、多様な教訓本をはじめとする著作が生み出されるにいたる事情を明らかにした。

Keywords : 貝原益軒, 学問と教育論, 太平の世, 安楽, 格物窮理, 有用の学, 民生日用

### 1 問題の所在と本稿の課題

『養生訓』『和俗童子訓』『大和俗訓』などの著者として知られる貝原益軒(寛永7—正徳4, 1630—1714)は、徳川三代将軍家光から七代将軍家継の時代の近世封建体制の確立・安定期において、儒学を中心として広範な領域へと学問的関心を拡大するとともに、和文による多くの教訓的書物を著して社会啓蒙的な学問を展開した江戸前期を代表する儒学者である。

貝原益軒の時代において、人々が自己の身体を養うことや大人が子どもの成育をうながすこと、すなわち養生や教育の営みといった問題は、社会全体がその課題として関与するべき関心事としてではなく、個々の人間がそれぞれの責任において対処しなければならない事柄であった。

そのような状況にあって、人間は「天地の恩」によって万物にすぐれた存在として生をうけているととらえる益軒は、すべての人間がその天地の恩に報い、「人の道」をつくし、その生を全うすることが「人間の大事」であり「人の職分」であるという<sup>1</sup>。益軒のこの考えにもとづけば、人たるものがその「身を慎み、生を養ふは、是人間第一のおもくすべ

き事の至也」<sup>2</sup>というように、人間が自らの健康を保持し、「わが身をたもつ」こと、すなわち「養生」という営みは、一人ひとりの人間が取り組むべき、生きていく上での課題となるのである<sup>3</sup>。

これと同じように益軒は「教育」に関しても、その営みを、個々の家において大人が子どもの成長を意識的に促していく事柄と捉えるとともに、その営みをだれでもが取り組める方法にまで具体化しようと試みた。すなわち益軒は教育の問題についての関心を、思想や理念の域に閉じ込めてしまうのではなく、「子弟をおしえ、人材をやしなひ来す法」(『和俗童子訓』)<sup>4</sup>として、日常における実践が可能な、教育的方法的展開にまでその視野を拡充していったのである。益軒の最晩年、85歳の時の著書である『慎思録』を見ても、そこにおいては教育の問題が「教育於人之法」(人を教育するの法)<sup>5</sup>として論じられ、また「教育於人之道」(人を教育するの道)<sup>6</sup>としてもとらえなおされている。益軒の教育論においては、対象としての<人>、営みとしての<教育>、具体的方策としての<法ならびに道>の三者が不可分な形でとらえられているといえるであろう。

儒者たちは江戸期日本の知識人であったが、中内敏夫によってつとに指摘されているように、江戸期

の儒者にとっての教育の問題とは、「治国平天下」への関心に伴って意識の次元にひきだされてきた世界であった。それであるが故に、彼らが教育について論じることは政治や経済、宗教に関する論の一環として、それにひきずられて出てきている教育行為への言及であり、みずからの体系内部に出発点をもっている思想体系ではない場合が多かった<sup>7</sup>。さらに我が国では「福沢諭吉が出てくるまでの日本では、＜思想＞とは不必要なものごとを詮索する態度としてしりぞけられ、思想というべきところも、＜説＞や＜法＞といいくるめる傾向が強かった」とも指摘されている<sup>8</sup>。

このような傾向が一般的である中で、貝原益軒は「めずらしく問題を思想問題としてとらえていこうとした人」ではあるものの、「その彼でもやはりこれを＜法＞としてとらえる誘惑に勝てなかった」と指摘されている<sup>9</sup>。この見方からすれば、教育や養生に関する議論を展開するにあたり、それを＜法＞や＜道＞として提示しようとする益軒の志向は、教育論としてみれば思想としての深まりを制約するものであったと考えられるのは当然であるだろう。しかし、はたしてそれは彼の思索の不徹底さによるものであったのだろうか。

益軒は『養生訓』『和俗童子訓』『大和俗訓』など、後に『益軒十訓』として総称される一群の教訓書を執筆し<sup>10</sup>、その中で養生や教育について具体的に実践可能な形で教えを展開した。辻本雅史が指摘するように、『益軒十訓』は、益軒が「みずからの儒学思想にもとづいて実際の生活上の規範を多方面にわたって易しく実践的に説いている」ものであり、「観念的な記述ではなく、技術的で実践的な方法を具体的に説くことに主眼がおかれている」のである<sup>11</sup>。

このような性格が指摘される、和文による教訓的著作において、晩年の益軒<sup>12</sup>は教育の問題を思想の次元で掘り下げるだけでなく、方法の問題としても具体的に展開しようとしたのであるが、それは、益軒が儒者として、自らの思想を論理的に展開する事とは異なる別の意図を見据えていたからであろうと考えられる。泰平の世に生きる益軒が、晩年において教訓的著作の執筆という、本来なら儒学者には求められない行為によって、自らの使命を果たそうとしたのは、彼がその生涯を通して拠り所としてきた学問観に促されたものであると思われるのである。すなわち、『慎思録』に見られるように、益軒の学問において志向されたのは「有用の学」<sup>13</sup>なのであるが、学問が有用の学であるには、実践性と実用性を欠いてはならないとする益軒の実学的な学問観<sup>14</sup>こそ、教育論の方法論的展開を可能にしたものと考

えられるのである。

益軒がそのような学問の実用性を強調する姿勢をより簡明に述べた言葉が、「民生日用」に資するという言明であった。すなわち、冒頭に述べたように、身体を養い子どもの成長を育むといった、養生や教育の問題が個々の家に生きる人間のそれぞれの責任において取り組まねばならない事柄であった近世社会において、儒学者として蓄積してきた学問と幅広い領域に亘る経験によって、人々に負わせられたそのような課題の実現に具体的な手がかりを提供しようとしたのが益軒なのであり、「人を教育するの法」(『慎思録』巻二)という、実践可能な形での教育論を展開させることになったその根底には「民生日用」に資するという益軒の実学的学問観があったと考えられるのである。益軒の学問の実学的性格と「民生日用」についての関連は、つとに秋山和夫によって指摘されている<sup>15</sup>。秋山は、源了円が『徳川合理思想の系譜』において指摘した益軒の学問の特質を踏まえながら、益軒の学問を貫く精神として批判的探求の精神を指摘するとともに、それが益軒の学問の特質である実践躬行をより具体化させる要因となり、「民用の資」としての学問の普及活動を促したことを指摘している。

ところで、汗牛充棟ともいえる益軒研究<sup>16</sup>の中で、江森一郎の『「勉強」時代の幕開け』<sup>17</sup>に収載された「貝原益軒の教育観—学習法的教育観」は、益軒の主著の一つである『大和俗訓』を中心に、益軒の教育論の特質を「学習法的教育観の構造」として探求した研究である。江森は、当時「為学」「学問」という熟語で示されていたものを念頭におきつつ、「学習法的教育観」を次のように定義している。「学習法的教育観とは、このような意味での＜学習＞(単に、知識の獲得や事実関係を理解することのみならず、実践・行動に結実することまでを含む儒教思想における＜学ぶ・習う＞の意味)を自らめざす(立志)＜学者＞(学習者の意)にその目標・方法(順序・心構え)を説くことに関心を集中させた教育観である」(同書179頁)<sup>18</sup>。

しかしながら江森は、益軒においては「教えること」に対しても、その関心は原朱子学よりもはるかに強いのであり、益軒においては朱子学の学習法的教育観を継承しながらも「教える」ことに対する関心がさらに深化されていることを指摘している。すなわち「益軒は学習法的教育観のもとで＜教える＞ことに対してもかなり深い考察をしている」(同書192頁)というのである。それであれば、今後このような点に留意し、学習法的教育観の視点を踏まえつつ、益軒教育思想の全体像をとらえる必要がある

だろう。そこで本研究は次のような仮説のもとに益軒教育思想の歴史像を描きたいと思う。

益軒は、一連の教訓書のなかでも早い時期に書かれた『大和俗訓』では、大人・青年を主たる対象として学習法的発想にもとづいて教育を論じたのに対し、同書より二年後の宝永7年（1710）、益軒が81歳の年になった『和俗童子訓』においては、「子ども」を教養育む大人の側に重点を移して教育論を展開した。しかもその際、『大和俗訓』において強調された<立志><自問><自得>といった学習者の自発性を尊重しつつ、それらを、教える側がしっかりと踏まえながら、いわば子どもの特性を充分理解した教育論を展開したのが益軒の『和俗童子訓』なのである。すなわち、『大和俗訓』において明らかにされた学ぶ行為における主体性の強調が、『和俗童子訓』においては、子どもの学習や成長を育ていく大人の側の留意点として系統的に、方法論的に展開されているのである。そしてこのような教育に対する方法論的展開を可能にした主要な要因として、「民生日用」に資するという益軒の実学的学問観があったのではないかと考えられるだろう<sup>19</sup>。

本研究は、以上述べたような先行の諸研究から示唆を受け、わが国の近世において、教育を人間に必須の営みとして把握するとともに、教える側の視点から、教育のあり方についての見解を具体的に展開した貝原益軒の学問と教育論の特質を、民生日用との関連において明らかにすることを目的とする。民生日用との関連において益軒の教育論を分析することによって、「近世社会の家における子育てがいかなる課題意識と具体的な方法とによって実践されてきたか」といった問題にも一定の理解を得ることができるものとおもわれる<sup>20</sup>。

本稿は、このような問題意識にもとづいて行われる研究の手始めとして、まず初めに益軒の教育論が展開される時代背景の特質を、「太平の世と安楽」という視点からとらえ、次いで、晩年における教訓的著作の執筆を促した要因として、益軒における格物窮理の工夫および有用の学という学問観の展開の様相を明らかにすることを主な課題とすることで、今後の一連の研究の基礎的考察としたい。

## 2 益軒の時代と太平の世における安楽

### （1）益軒の時代

益軒がその生涯の多くを送った十七世紀は、平和と秩序という点において、先立つ世紀から際立って区別される。長い戦乱の世を生きてきた人々にとって、徳川政権がもたらしてくれたのは、何よりもまず「天下泰平之御代」<sup>21</sup>であった。益軒と同世代の

歌人で、武家の出自である戸田茂睡（寛永6—宝永3, 1629—1706）は、伝統歌学への最初の批判者として知られるが、彼はその著『梨本書』のなかで、人が感じるべき四つの恩<sup>22</sup>の第一を、「天子の恩」に換えて「公方様の御恩」とし、次のように述べている。

「いにしへより四恩といひしは、第一天子の恩、第二に国土の恩、第三に父母の恩、第四に衆生の恩といへり、今は公方様の御恩第一成べし。あめが下おだやかにおさめさせ給ふゆへに、兵乱のさはぎなく、我身ばかりにもあらず一家一門の物まで、弓箭に命をおとす事なく、天よりうけたるまゝの命を終る、そのみならず、悪人いたづらものをつよく御いましめなざる、故に、盗賊の難儀もなく、夜中に野山を独ゆくにもきづかひなく、心しづかに我も人も世を渡る、此恩徳まことに有難き事也」<sup>23</sup>

こうした中であっては、近世人にとって自らが生きる日常の世は、もはや厭いの対象でもなく、そこからの離脱を願うものでもなかった。茂睡の『梨本書』には、平和が実感される現実世界であって、「此世にあるものは、この世の作法をよくつとめておぼつかなき極楽をばねがはぬがましなるべし」<sup>24</sup>という言葉も見られる。徳川権力による政治体制が相対的に安定したこの時期において、人々の関心はこの世をいかに生きるかに注がれるようになったのである。

この世における自己の存在の意味と行為のあり方を考え始めた近世の人々に対して、一定の指針を与えようとしたのが儒学であった。確かに、近世思想の基軸となった中国宋明時代の儒学は、徳川政権のイデオロギーとして封建支配の枠組みを正当化する役割を担ったのであるが、一方においてこの学問は、個々の人間は社会とのかかわりの中で主体的に自己を形成していくことが必要であるとともに、それは可能であるという思想性を内在させていたことを見落としてはならない<sup>25</sup>。

その一つの例として、近世初期を代表する儒学者中江藤樹（慶長13—慶安1, 1608—1648）の『翁問答』を見てみよう。

「天道を根本として生れいでたる万物なれば天道は人物の大父母にして根本なり、人物はてんとうの子孫にして枝葉なり。根本の天道、純粹至善なれば、そのえだ葉の人物もみな善にして悪なしと得心すべし（中略）人間はみな善ばかりにして悪なき本来の面目をよく観念すべし」<sup>26</sup>

藤樹は、人間の本来的な善性と平等性に教育の必要性と可能性の拠りどころを見出しているのである。

また、益軒とほぼ同時代において、孔子・孟子の思想の本質を探り出しつつ、活物ないし生々の存在としての人間認識<sup>27</sup>を基底とした伊藤仁斎（寛永4—宝永2，1627—1705）は、その著『童子問』において次のように述べている。

「人の性をして、頑然無知なること、鶏犬の如く然らしむるときは、則ち百の聖賢有りと雖ども、其れをして教えて善に之かしまること能わず。惟其れ善なり。」<sup>28</sup>

性・道・教のそれぞれの特質と関係を説明する箇所において述べられたこの仁斎の言説の根底には、人間の善性の承認という認識が明白であろう。仁斎においては、この認識に立脚してはじめて「教」の意義が次のように確信されるのである<sup>29</sup>。

「其人をして聖為り賢為らしめて、天下の泰平を開く所以の者は、教の功なり。故に道に次いで貴き者は、教なり。而して道を尽し教を受くる者は、性の徳なり。故に性も亦貴し。然れども教は功有って、性は為ること無し」<sup>30</sup>

「天下同じく然るの人」<sup>31</sup>という人間理解から、仁斎は、この人間そのものの平等性に依拠し、実践を通じて人間の本性を善にしていく行動として、教育や学問の過程を大切にすることになるのである<sup>32</sup>。

さて、平和の中で体制が完成するとともに、制度や文化の定着が進行し、社会はもっとも落ち着きを見せる時期を迎える。益軒の生まれた寛永7年（1630）は、徳川家康の内意によって將軍秀忠に仕えた林羅山が、幕府の援助を受けて上野忍岡に学塾を設立した年であり、この学塾はその後の湯島聖堂へと連なる学問興隆の基盤となる。

元禄5年（1692）、長崎出身の町人学者西川如見は、その著『町人囊』において、同時代の状況と人々の意識を次のように活写している。

「百年以来は天下静謐の御代なる故、儒者、医者、歌道者、茶湯風流の諸芸者、多くは町人の中より出来ることになりぬ（中略）かゝる世に生まれ、かゝる品に生れ相ぬるは、まことに身の幸にあらずや。下に居て上をしのがず、他の威勢あるを羨まず、簡略質素を守り、分際に安んじ、牛は牛づれを楽しみとせば、一生の楽しみ尽くる事なかるべし」<sup>33</sup>

経済社会における民衆の地位の上昇に伴い、支配者である武士の地位の相対化が徐々に進行する状況、そのなかで文化の領域においても民衆がその発展を担う実力を見せ始めた元禄期の様相が描かれたこの一文において、「幸」や「楽」の言葉が多用されていることに注目すべきであろう<sup>34</sup>。これらの言葉からは、近世に特有な現世志向が読み取られると

ともに、現世のなかで幸や楽を求めることが全ての人間に開かれた営みとして承認されていることがうかがえる。さらに、その根底には、人として生きるという点においては、人間は道徳的に平等であるという如見の人間観がある。すなわち、如見は『町人囊』において次のように述べている。「畢竟人間は根本の所に尊卑有るべき理なし。（中略）人間本心の上におるて何ぞ貴賤の差別あらん。いかなる賤がふせやに居ても、心は万人の上に延んものなり」<sup>35</sup>。職分は異なっても人として生きるという根本においてなら違いは無いというのである。ここに、近世社会の人々がそれぞれの具体的な生活の場において心置きなく「幸」や「楽」を求める道筋が付けられたといえるだろう<sup>36</sup>。

## （2）太平の世と安楽

では、このような状況の中で、益軒は同時代をどのようにとらえているのだろうか。益軒が元禄16年（1703）に著した『君子訓』を見てみよう。

この書は、益軒が自序のなかで、「民を治むるには古の聖の道を法とする事は言ふもさらなれど、今の世の人、多くは経史に昧く、又官職に居る人は学ぶに暇なくして、古の経済の道にうとし。ここに我が愚昧をわすれて、かつて聞ける所を述べていささか古の道の片はしをあらはす」<sup>37</sup>と述べているように、治者の立場にある者を主な対象として書かれたものである。筑前福岡藩士の家に生れた益軒は、儒者としてまた藩士として黒田家に仕え、元禄13年、71歳で致仕する。『君子訓』は益軒が致仕後ほどなくまとめたものであり、そこには、世を治め、身を修める「仁政」の道が説かれているのである。このような『君子訓』のなかで、益軒は自らが生きる時代を次のようにとらえている。

「昔の人、太平の世に生るゝを以て楽とせり。もし乱世に生れなば、憂ひにしづみて身を終りなん。豈不幸にあらずや。（中略）今此の御世となりて、筑波山のしげき御恵により、飛鳥川の淵瀬になるうらみなく、四つの海波静かに、七つの道おだやかなり。かかる太平の時に生まれあへる事、昔の人の楽とする所にして、今の人の幸はなはだし」<sup>38</sup>

これまでには思いもよらなかった「太平」の世が現出し、そこに生まれ暮らすことは、乱世に生きざるを得なかった人が望んでも得がたい楽であり、幸でもあるというのであり、仁政とはまさに「今の民、治世に楽める」「御恵みを報い奉る営みに他ならない」というのである。

さらに、『益軒十訓』の一つで、益軒没後に公刊

された『初学訓』（享保3年、1718）では、太平の世の中での人の生き方に関して次のようにいう。

「今の世に生るゝ人、乱世にあはず治世にすめるは、大なる幸なり。是世を治め給ふ大君の御めぐみ也。大君はたとへば天地を大父母とするが如し。主君の上なる大主君なり。其の御威徳によりて世おさまり、我が身安楽に此の世にすめれば、是亦四民ともに大恩をかうふれり。其の御めぐみをあふぎて、わするべからず」<sup>39</sup>

ここには西川如見と同様の時代認識が明白に見られるとともに、益軒の多様な言説を理解する鍵の一つがあるといえよう。すなわち益軒の学問は安定期の社会の特徴をよく反映したものであるといわれるように<sup>40</sup>、「太平の世」という肯定的な時代認識とその中で享受できる「安楽」な生の営み、そのための生き方の模索という性格にその思想の特質があると考えられるのである<sup>41</sup>。

「大君の御めぐみによりて、かゝる太平の楽をうくる事をよろこぶべし」<sup>42</sup>と説く益軒ではあるが、彼のこのような思想の性格については「非成長の哲学」<sup>43</sup>という指摘もなされている。『初学訓』には、かつて乱世のなかで、安堵からは程遠い生活を余儀なくされた過去を振り返り、今の太平のなかでの安穏な暮らしを大切にし、それを「楽」ととらえることの必要を、次のように指摘している一節も見出される。

「いにしへの乱世の時を聞くに、力ある者は、つねに干戈を事として、しばしば戦いのぞみ、力なき者は、糧をつゝみて、時々山林に逃げかくる。一日も、安堵の思ひなし。これを思ひて、今の太平の御代の、安穏にして無事なるを楽しむべし」<sup>44</sup>。

このような特質は、益軒晩年の『養生訓』（正徳3年、1713）にも見出すことが出来る。立川昭二によれば、元禄期には全国の耕作面積が倍増し、庶民の食生活も一日三食となり、江戸や大坂では、白米を常食とすることが脚気の流行さえももたらすまでになっていたという。こうした中で江戸を生きる人々にとって、日々の暮らしの安定が何よりも大切なこととなり、自分や家族の健康や病気の事が大きな関心事となってくるのである。それであるが故に、そこでの養生とは、健康法という狭い意味ではなく、より広く深い意味での生き方にかかわる事柄という意味を持つこととなり、益軒の『養生訓』はそのようななかで、養生についての基本的な思想を総括的に提示したのである<sup>45</sup>。

益軒は、『養生訓』の中で、この世に生きる人間がどのような願望をもっているかについて次のよう

に述べている。

「人となりて此世に生きては、ひとへに父母天地に孝をつくし、人倫の道を行ひ、義理にしたがひて、なるべき程は壽福をうけ、久しく世にながらへて、喜び楽しみをなさん事、誠に人の各願ふ所ならずや。如此ならむ事をねがはゞ、先古の道をかうがへ、養生の術をまんで、よくわが身をたもつべし、是人生第一の大事なり」<sup>46</sup>

この世界で一番尊く重いものは、「人身」すなわち人間の生命であるという、命とからだの尊厳への意識から、益軒はその「身を慎み、生を養ふ」養生を「人間第一のおもくすべき事の至り」とし、人間にとって最も大切な実践的倫理と捉えているのである<sup>47</sup>。

益軒において天地とは、『大和俗訓』の巻一、「為学」において述べるように、「万物をうみ給ふ根本」<sup>48</sup>であり、「大父母」に他ならなかった。人たるものはこのことにおいて「かぎりなく天地の大恩」を受けているのである。ここから益軒において「人の道」とは、このような「天地につかへ奉る」ことと同義のものとなる。すなわち「天地につかへ奉るは人間の大事にてしばしも忘るべ」きものではなく、「常に慎んでつかへ奉り、力をつくすべき事、是人の職分にて、至りて重き大事なり」<sup>49</sup>というのである。益軒において養生が実践的倫理としてとらえられる所以である。

すでに述べたように、その思想の特質について「非成長の哲学」とも指摘される益軒においては、太平の世は肯定し、享受すべきものであった。とはいえ、『家道訓』のなかで、「凡太平の世の勢は年々に万の事必華美におもむきて、おごりつひへ多くなりもてゆくもの」<sup>50</sup>と述べているように、益軒はそれが理想の姿に止まるものではないことも明確に認識し、世の変わり行く姿も見据えているのである<sup>51</sup>。太平の世を享受するとはいえ、「只其ままにて世の成行にまかせぬれば、人々困窮して家をたもちがたし。俗にながれ時にうつりゆかば儉約の道立たずして後には家をやぶる」<sup>52</sup>のは必至であろうと断言するのである。社会の現実的な変化に対する、このような先を見通したまなざしは、彼自身が体験した村落生活と自ら実見した博多、京都、江戸の都市生活との比較によってもたらされた部分も多いものと考えられる<sup>53</sup>。

益軒は50歳を過ぎた頃、藩の要路にある宰臣に宛てて四通の意見書を提出した。『益軒全集』巻之三に、『益軒先生与宰臣書』と題して集録されている、これらの意見書の基調にある論理の中心は、天道にかなった仁政の実現ということであり、天道思

想から導き出される為政者の職分論が説かれるのである。

「凡天道は万民を生じ給ひ、我も人も凡天下国家の人民は、皆天の子にて、本は我と兄弟にて御座候。天地は人民万物の父母にて御座候故、人物を御恵み被成候御心深く御座候。(中略)国家を治め数万の人民を御預り被成、御位は猶又天道より其人に諸民を御預け被成たる御事にて、万民を御あはれみ不被成候ては職分に叶はざるにて御座候」<sup>54</sup>

益軒の政治論の眼目は、天道に叶うか背くかによって「国家の禍福」が決定するという点にある。すなわち、仁愛に基づいて天道に叶う政治を行えば、「自然と御吉事来り、災難は出来申間敷候」<sup>55</sup>というのである。為政の任に当たる者の責務について、一見すると儒学の枠を出ない建前に終始した見解のようではあるが、ここには、当時の世の中の変化と政治の原則の喪失された状況についての益軒の観察が踏まえられているのである。

「人民の上たる人は、民の父母と申し候て、万民を御救助被成候が定まりたる御職分にて御座候」と益軒が述べるとき、そのすぐ後には、このような原則に反した政治の現況が、「近年の御政道は、唯一向下民の財を御奪ひ取り被成候御工夫迄にて、更に下民を御恵み被成候事無御座候」と厳しく指摘されているのである<sup>56</sup>。天道にかなった仁政が説かれるその背後には、現実の世を生きる人民の暮らしと政治の現実が見据えられているのである。元禄3年(1690)の「覚書 元禄三年黒田一貫に送る書」には、「以往」に比較して、人心の変貌した今の様が畳み掛けるように指摘されている。

「今に至っては人心風俗日を追て衰へ、只利欲是を勤めて廉恥なく、貪欲深くして礼儀をかへりみず。仁愛なくて民をむさぼり、人を苦しめ、物のあはれみをしらず。或時勢に乗じ己が才にほこり、人のうれへをしらず。」<sup>57</sup>

太平の世を肯定するとはいえ、決してそれを手放しで礼賛するのではなく、世の変化を見据えながら、安定して生きるにはどうあればいいのか、益軒は自らの関心と営為をこの点に収斂させ、「わが志たるすぢ」(『大和俗訓』自序)として、『教訓書』の執筆という行為によって世に問うていくのである。

### 3 格物窮理の工夫と有用の学

#### (1) 格物窮理の工夫～天下理外の事無し

太平の世の到来を喜び、人々の安楽な暮らしを願った益軒であったが、彼は『大和俗訓』巻二の「為学」下の最後の部分で、世の中の行く末に思いを馳

せ、人知の進展と正しい学術の発展が国の未来を創ると説いて、次のように述べている。

「本朝の儒術、古来二千歳、寥々たりといへども、太平日久しければ世の人文もいよいよやうやく開けぬべし。しからば、今より百年の後は文字の習も拙からず、義理の学も大に明らかになるべし。文明の国となりて、誠に君子国の名にかなふべし。只今より後、学術の正しくしていやしからず、学者の志真実にして、聖人の道をあつたふとび信ぜむことをこひねがふのみ」<sup>58</sup>

自戒のように語りかけられたこの言明は、「聖人の道をあつたふとび信ぜむ」というように、従来の学問の枠組みを堅持しつつ、義理の学問をいっそう発展させることで、人々の安楽な暮らしの永続を願う、益軒の学問の目指す方向が述べられたものである。

益軒においては学問的探求の原点に儒学が正置され、彼の知的活動のすべてが、儒学の理念を主軸にして成立するのであるが<sup>59</sup>、そのようななかで学術が発展しうる余地は残されているのだろうか。一体、益軒のいう学者の真実な志とは何であるのか。正しい学術とはいかなる方法と内容をもつものなのか。本節ではこの点に関して、「格物窮理の工夫」と「有用の学」の二つを軸として考察してみたい。

益軒没後、数十年を経た寛政2年(1790)、近世後期の歌人として、また文章家として知られた伴蒿蹊は『近世畸人伝』を著し、その中で中江藤樹とともに、儒学の名家として益軒を取り上げ、次のように記している。

「その学博く和漢に互れること、等輩尠しといへども、性甚謙にして、只身の及ざることを恐れ、名に近づく事を喜ばず。常に言、吾人に長たることなし、但恭黙道を思ふのみと。もとより愛人濟物をもて要とせる故に、其著所の書多く平仮名に記して、通俗のため教ること丁寧反復す。家道、養生、大和俗訓、楽訓などは尚さもありなん。鄙事記のごとき、日用の細務にまでも及ぶは、近世諸儒、唯自己の学力を示して、梨棗を費やすものと、相去る事天淵なるべし」<sup>60</sup>

ここには益軒の学問の個性が明確にとらえられている。「通俗のため教える」、「日用の細務にまでも及ぶ」、これらの点において益軒の学問は当時の儒者と「相去る事天淵なるべし」というのである。益軒の学問が儒学を主軸にしつつ、その外延を広げていく契機はまさに、学問の成果に基づいて「通俗のため教える」という目的意識と「日用の細務にまでも及ぶ」という、学問の方法ないし内容の新たなとらえなおしに見出されるのである。このことは、益

軒の主著の一つで、益軒79歳の年に完成された『大和本草』を見ても明らかである。中国の李時珍の『本草綱目』に学問的な刺激をうけた日本近世の本草学の、日本的な自立ともみなされるこの『大和本草』の自序において益軒は学問の在りようを次のように述べている<sup>61</sup>。

「天地の道、常に行いて息ず。而して天地別に為す所無し。只、生物を以て事と為すのみ。万物生生して窮まらざる所以也。是を以て六合の内産する所の品物浩穰究め尽くすべからず。其の民用と為す者、また弘多にして垠無し。然らばすなわち学者明らかに庶物を知るの功、また豈に広博ならざるべけんや（中略）蓋し経は以て道を載せ、史は以て事を記す。其れに次ぎ、物を集むるの書また無かるべからず」（原漢文）<sup>62</sup>

益軒において、学問は第一に「経」に拠って「道を明らかにする」ことであり、第二には「史」に基づいて「事に達する」ことであるのはいうまでもない<sup>63</sup>。ここではさらに「物」を「集むる」という、学問の新たな領域と方法が儒学の内に取り込まれているのである。ここで益軒のいう「物」は『五常訓』に「物とは、とりけだもの草木をいふ」<sup>64</sup>というように、人間を除いた鳥獸草木が想定されているのであり、本草書とはこれらの物を集めた書に他ならなかったのである。

近世の前半には、日本朱子学の一つの潮流として、益軒に見られるような、内面的世界とは別に事物世界へ向けられた知の系譜が存在した<sup>65</sup>。このことは次に示す近世前半に成立した百科事典類を見れば明らかである<sup>66</sup>。

近世前半の百科辞典類（1630年～1714年）

書名	著者	巻冊数	刊行ないし成立年
1 多識編	林羅山	2巻2冊	1630年刊
2 訓蒙図彙	中村惕斎	20巻	1666年刊
3 和漢名数	貝原益軒	1巻	1678年刊
4 続和漢名数	〃	3巻3冊	1695年刊
5 日本積名	〃	3巻3冊	1700年刊
6 万宝鄙事記	〃	8巻4冊	1705年刊
7 大和本草	〃	16巻 ※	1709年刊
8 和爾雅	貝原好古	8巻9冊	1694年刊
9 和漢事始	〃	13巻6冊	1697年刊
10 庶物類纂	稲生若水	362巻	1704年未完
11 和漢三才図会	寺島良安	105巻81冊	1712年成立
12 名物六帖	伊藤東涯	14冊又は32冊	1714年成立

※ 本巻の他に、付録2巻・諸品図3巻を含む。

これら享保期（1716～35）以前に刊行若しくは成立した百科事典類の著者は、最後の伊藤東涯以外はすべて朱子学系の知識人（儒者・医家・本草家）である。すなわち、八木清治が指摘するように、林羅山以後、次第に知の領域が拡大され、天・地・人・万物に及ぶ百科辞典の出現が可能になっていったのである。しかし、このよう系譜の中で、益軒をして単に経験的知識の集積に終始させなかったのは、実学を重視する学問観であったといえるだろう。前節において仮説的に述べたように、晩年の益軒が和文による教訓的著作の執筆という行為に自らの使命を見出したのも、彼が生涯を通して拠り所としてきた経験的、実学的学問観によるものと考えてよい。源了円によれば、この学問観の基底にあるのが経験的合理主義の立場であり、益軒のそれは中国の朱子学になかった新たな方向が取られ始めたことを示すものであるといえる<sup>67</sup>。

もともと朱子学自体、「一草一木一昆虫の微に至るまで各亦理有り」（朱子語類）というように、格物窮理の側面を持つものであった。しかし、それは自然認識の方向にではなく、古典の中にある義理の講明にとどまり、具体的・経験的に物の中にある理を究明するにはいたらなかった<sup>68</sup>。これに対し、益軒は『大和本草』に明らかなように、究明すべき対象を人間以外の「とりけだもの草木」にまで拡充するのである。そこには格物窮理についての新たな工夫が必要であった。

「知を致すの工夫は、一身の中より、以て万物の理に至るまで煩擾を厭わず、講究すること多ければ、則ち自然に豁然として覚悟すること有り。是れ格物窮理の工夫にして、其の中に務べきを以て急と為す。本末緩急の序有りて紊る可らざるなり。若し一身に備うる所の道理を捨てて省みず、泛く万物の理を究めんと欲するも、これ儒者の学に非ざるなり。便術者のことなり。須らく本より末を領し、近きより遠きに至り、序に循うて統紀あるべし」<sup>69</sup>（原漢文）

人たるものが知識をきわめるといことは、自分の中にある道理即ち人倫の道から、全ての事物の中にある道理に至るまで考え究めることであり、それが緻密で着実であれば自ずと迷妄や疑惑から自由になり悟り目覚めるといのである。そしてこれこそが『大学』と『易経』にいう、「格物」と「窮理」の意義であると説くのである。しかしこれだけではいまだ朱子の説くところと大きな違いは無い。

一体、益軒は「一身に備うる所の道理」と「万物の理」、すなわち人の道と事物の理とを併せ兼ねる朱子学の立場に立ちながらも、そこからどのように新たな展開をしようとするのだろうか。ここで益軒

の「事天地」説、すなわち「天地に事える」という考え方について見てみよう。

本論の冒頭にも述べたように、益軒によれば人間は「天地の恩」によって万物にすぐれた存在として生をうけているのであり、すべての人間はその天地の恩に報い、「人の道」をつくし、その生を全うすることが「人間の大事」であり「人の職分」であるという<sup>70</sup>。益軒はこの点に関して『自娛集』において「事天地説」として項目を立てて次のように論じている。

「これ天地は万物の父母、これ人は万物の霊。故に人たるの道、終身の職業、ただ、天地に事ふるに在るのみ。」<sup>71</sup>（原漢文）

「天地に事ふるの道、稟る所の五常の性に率て人倫を愛するのみ。人倫を愛するの中、父母を厚くするを以て最も重しと為す。蓋し父母は人倫の本也。厚くせざるべからず。親に親しみ民を仁するの余、又物を愛するに在るのみ（中略）物を愛するも亦是れ天地の心に奉若する所以にして、之に事ふるの一事也」<sup>72</sup>（原漢文）

人が人として生きるということは、万物にすぐれた存在として生を享けているという天地の恩にこたえ、人倫への愛に止まらず、物への愛も忘れないことであるというのである。

この「事天地説」は『大和本草』の巻之一、凡例にも述べられているが、そこでは「人すべからく天地生物の心をうけしたがって人物を愛育すべし。これすなはち、人の道を為して天地に事ふる所以の理なり。人物を愛育するにはまた自ずから本末軽重有り（中略）只、分に随いて物を愛するの心、日日之を存して忘るべからず」<sup>73</sup>とあり、益軒の儒学においては、天地万物のなかでの人と物との関係が、倫理的な価値の序列のなかに位置づけられていることがうかがえる<sup>74</sup>。すなわち、辻本雅史が指摘するように、益軒の儒学は決して人倫世界のみを対象とするのではなく、天地を構成する物も含めた世界を学問の対象としてとらえたのであり、天地、人、物の三者の連続的な関わり合いを問い、そのなかでの人のあり方を考えるという、朱子学とは質を異にする益軒の儒学の特徴があったと考えてよいだろう<sup>75</sup>。

ここから益軒の儒学における「格物窮理」は万物の「理」を究明する方向を志向する事となるのだが、その根底には、あらゆる事物には道理があり、道理をもって判断できないことは無いという、合理主義的な思考が存在するのである。益軒は、『慎思録』において、「天下理外の事無し（中略）蓋し理に常有り変有り。其の変なる者は常理に非ずといへども此亦理中の事。天下豈また理外の事あらんや。此れ君子の学、理を窮むるを貴ぶ所以也」<sup>76</sup>とのべてい

るのであり、この「天下理外の事無し」という認識が益軒の学者としての学問に向かう姿勢を方向付けるのである。この点について『慎思録』の中で益軒は、次のように述べている。

「学者の道に於ける、亦当に是を以て法とすべし。蓋し、天地万物の理、天下古今の事、广大と謂ふべし。須らく其の心胸を開潤にし、其の聞見を広博にし、以て天下古今の善を取り、天地万物の理を明らかにすべし」（原漢文）<sup>77</sup>

このように益軒にとって窮理は自らの学問の方法でもありまた同時に目的でもあったのであり、「益軒のぬききたい窮理の志向が、かれの思考を合理的に秩序づけ、物理を論じてその学を開こうとする意欲をも強く支えたにちがいない」<sup>78</sup>とあってよいだろう。益軒に於いてこのような学問に従う事は、「嗚呼、窮理の学、力を用うること久しければ則ち天下の理に於いて通明ならざる所無し。其の楽、亦大ならず乎」<sup>79</sup>と述べるように、畢竟彼にとって「楽」に他ならなかったのである。

## （2）有用の学～用に立ち申す事

本節の冒頭で指摘したように、益軒は世の中の行く末に思いを馳せ、人知の進展と正しい学術の発展によって国の未来が創られると説いていた。このような思考が益軒において展開しうるには、彼が学問のあり方に関して、実学性や学問の有用性を大切にした事によるところが大きいであろう。

実学という言葉は、現在では「実証性と合理性に裏付けられ、われわれの実際生活の役に立つ有用な学問というような意味に定着している」<sup>80</sup>とあってよい。源了円によれば、このような実学概念は歴史的に見れば、それを主張する人の立場や時代に応じて変化する、きわめて状況的な思考であり、既存の思想や価値観、社会的価値の体系に対して新しい学問や思想を樹立しようとする側での正当性の主張という、ポレミカルな概念であると考えられる<sup>81</sup>。この視点に立って、近世社会における実学概念を類型化するならば<sup>82</sup>、第一には実践躬行の実学がある。これは五倫五常の道徳を人倫の道として実践躬行するのが実学であるとする。第二は、経世済民の実学であり、これは第一の実践躬行の実学が道徳的実践の学として倫理的であるのに対し、経済実用を標榜し、治者としての武士階級を対象として幕藩行政に資する実用的な効用を企図する、政治的実用の学であるところに特質がある。第三は、利用厚生の実学である。第一、第二にあげた、実践躬行の実学と経世済民の実学が、その基盤においては徳の実現を説く点において同一の性格を持つのに対し、第三の利



用厚生の実学は洋学において見られる性格であり、実証性、事実性に重点が置かれる。

このような実学概念の類型の中に、益軒の学問はどのような位置をしめるだろうか。益軒の場合は、学問が実学であるか否かの問題は、その学問が有用であるか無用であるかに焦点化されて論じられる<sup>83</sup>。

いわゆる『益軒十訓』のなかでも早い時期の著作である『君子訓』（元禄16年、1703）では次のように述べている。

「学問は身を修め人を治むるを有用の学とす。是眞の学問なり。もし左もなく、文字を知るを以て学問とおもひ、多く聞き多く見るに博学多識なりとも、何の益もなき無用の学なるべし。故に唯有用の学を務べし、無用の学をなすべからず」<sup>84</sup>

「身を修め人を治むる」のが「有用の学」であり、この学こそが「眞の学問」であるとし、これに対し「文字を知るをもって学問とおも」うようなのは、いくら「博学多識」であっても何の益もない「無用の学」であるとしている。益軒は実践躬行と経世済民を目的とする学問に有用性を見出しているのであり、その目的から逸脱した、単なる博学多識を無用なるものとして批判しているのである。有用・無用をこのように峻別する益軒は、いわゆる訓詁詞章に類する学についても、それらが「学問の累（あやまち）」であるとして次のように批判する。

「今人の学を為す、訓詁に泥む者は極めて破碎支離にして窮理に切ならず。詞章に耽る者は、奇巧麗飾を務めて実に就くこと能はず。博覧を貪る者は、遊蕩汎濫にして諸本に腹するを忘る。異学に褻ゆる者は偏癖駁雑にして純正ならず。之を要するに皆學術の累と為すに足れり」<sup>85</sup>

これと同様な見解は『大和俗訓』でも述べられている。そこでは、孔子の『論語』「憲問篇」のなかの「古之学者为己、今之学者为人」（古の学者は己れの為にし、今の学者は人の為めにす）を踏まえ、「我が身を修めん為にする」のが「実学」であり、「人にしられんがためにする」のは「名利の学」であるという。益軒において「学問の本意」は「己が身ををさめんため」であることからすれば、学問は決して「聊人にしられん為にすべからず」であるという。こうして、益軒は「名利をねがふ心のみにて、我が身ををさむるに志なし」の学問を「偽学」と断じるのである<sup>86</sup>。

しかしながら、このように学問の有用性・無用性の区別を「人のためにするか」「己のためにするか」の観点からのみ判断するならば、益軒が『日本釈名』『万宝鄙事記』『大和本草』などの百科辞典に類する

著作をまとめる事の積極的意義も見だせないだろう。益軒は何を目的としてこのような著作物をまとめたのだろうか。そこには、「人のためにする」のでもない、また「己のためにする」のでもない、これらを包括した有用性のとらえなおしが必要であったと思われる。

ここで『大和俗訓』の次の一節を見てみよう。

「学問に有用の学あり、無用の学あり。わが儒の学は有用の学なり。有用の学とは、学問をすれば、わがため人のため益となるを云ふ。この故学問の道は有用の学をすべし。無用の学をすべからず（中略）日用人倫の道に志なきは、益もなきいたづらごとなり」<sup>87</sup>

益軒によれば、学問は「わがため、人のため益となる」ことで有用な学といえるのであり、身を修めて人倫の道を篤く行い、忠孝をつとめ善をなして「人を助けすくふ」ことを欠いては決して有用の学ではありえないというのである。すなわち、学問の有用性とは「名利の学」か「修身の学」かの違いによるのではなく、広く世に「益となる」か否かによって決まるのである。

すでに述べたように、伴蒿蹊が『近世畸人伝』において益軒の学問を称揚した際、益軒の学問が「愛人済物」をもって要としていること、「通俗のため教ること」「日用の細務にまでも及ぶ」ことを指摘していた事は、以上述べてきたような益軒の学問の有用性の意義を的確に把握した評価であったといえるだろう。益軒の願う「文明国」とは、まさにこのような意味での有用な学問によって人知が進展し、學術が発展していく国が想定されていたのであろう。

以上、本論では貝原益軒の学問と教育論の特質を、民生日用との関連において明らかにすることを目的として、まず初めに益軒の教育論が展開される時代背景の特質を、「太平の世と安楽」という視点から考察した。益軒は太平の世を肯定的にとらえる一方、世の変化も見据えながら、安定した生き方を模索したことを指摘した。次いで益軒の学問について、「格物窮理の工夫と有用の学」の視点からその特質を考察し、実学の内実が、広く世に益となるという観点からとらえられた事によって、益軒の多様な教訓本をはじめとする著作が生み出されるにいたる事情を明らかにした。これらの成果をふまえ、次には、益軒のいう「民生日用」の内実と、それが著作物にどのように具体化されてくるのかについて、主に教訓本を中心に考察していく事を課題としたい。

注

- 1 『大和俗訓』卷之一，為学上（『益軒全集』卷之三，益軒会編，国書刊行会復刻，47 - 49頁）。
- 2 『養生訓』卷之一，総論上（『益軒全集』卷之三，477頁）。
- 3 益軒は『養生訓』の総論において次のように述べている。「人となりて此世に生きては，ひとへに父母天地に孝をつくし，人倫の道を行ひ，義理にしたがひて，なるべき程は壽福をうけ，久しく世にながらへて，喜び樂みをなさん事，誠に人の各願ふ処ならずや。如此ならむ事をねがはば，先古の道をかうがへ，養生の術をまなんで，よくわが身をたもつべし」（『益軒全集』卷之三，476-477頁）。
- 4 『和俗童子訓』卷之二（『益軒全集』卷之三，189頁）。益軒においてこの「法」は，「父兄となれる人は，此心得あるべし」（同上）というように，子どもの教育に関わるものの弁えて置くべき事とされているのである。
- 5 『慎思録』卷二（『益軒全集』卷之二41 - 42頁）。この箇所は子どもの個性について言及した部分であり，「人の性を稟るや，おのおの異なり。一律を以て之を同じくすべからず（中略）子弟卑幼之輩といへども，其趣己と同じからざるを以てはなはだ其過失を督責すること勿れ」と述べ，「人を教育するの法」は「急迫なるべからず」と一般化する。引用箇所は原漢文である。
- 6 同上卷四，82 - 83頁。
- 7 中内敏夫『近代日本教育思想史』国土社，1973，15頁。
- 8 同上。
- 9 同上，17頁。
- 10 周知のように『益軒十訓』は明治26年（1893）に，当時女子教育奨励会幹事兼東京女学館教授であった西田敬止が修身用の参考書として，益軒の十三の教訓書の中より十を選んで公刊したものである。
- 11 『日本思想史辞典』（子安宣邦監修，ペリカン社，2001年）所収の「益軒十訓」に関する記述（辻本雅史執筆，同書47頁）。
- 12 『益軒十訓』に含まれる教訓書は，貞享4年（1687），益軒58歳の時の『家訓』を除き，他はすべて益軒が74歳以降の最晩年にまとめられたものである。これについては，井上忠によって「益軒の円熟した学風と豊富な人生体験」とがこのような多くの「大衆教訓書」を書かせるに至ったという指摘もされている（井上忠『貝原益軒』吉川弘文館，1963年，243頁）。また，井上は『益軒十訓』執筆の別の事情として「想像を逞しくすれば一つには書肆側のこうしたものへの執筆依頼が強く，また彼自身の財政状態もそれを承諾する一要素となったのではあるまいか。」（同上）と述べている。益軒が『慎思録』の巻末に付した「自己編」において，自らを述懐した文章からはそのような推測は不可能なように思われるが，この点については後考を俟ちたい。
- 13 益軒は，『慎思録』（卷之一）において次のように述べている。「学を為すは，將に以て用を済んとす。故に学は必ず事に施して，而る後有用の学と為るべし」（『益軒全集』卷之一，5頁，原漢文）。また，同じく『慎思録』卷之四では，「學術は世を経る所以なり。而して後世学を為す者，毎に經世之用に適はざるは何ぞや。蓋し理を窮め道を知るの学有り。是れ世を経め用に適ふ所以也。以て用あるの学と為すべし」（『益軒全集』卷之二，79頁，原漢文）という。これらによっても分かるように，益軒における有用の学とは，「平生章句に拘り，訓詁に泥む」ような学問や，「大言して高妙を説く」に止まる学問とは無縁のものであることは明らかである（同上，5頁）。
- 14 源了円は，このような益軒の実学的学問は「經驗的合理主義」に基づくものととらえている（『徳川合理思想の系譜』中央公論社，1972年，32頁）。
- 15 秋山和夫「益軒」（井上久雄編『日本の教育思想』福村出版，1979年）。
- 16 最近のまとまった益軒研究として，『貝原益軒一天地和樂の文明学』（横山俊夫編，平凡社，1995年）や，『「学び」の復権—模倣と習熟』（辻本雅史，角川書店，1999年）などがある。
- 17 江森一郎『「勉強」時代の幕あけ—子どもと教師の近世史』平凡社，1990年。この論文の初出は『教育学研究』（日本教育学会）45巻1号，1978年3月である。
- 18 「学習法的教育観」という把握は，中内敏夫が前掲書『近代日本教育思想史』（1973年刊行）の「日本人の教育意識と発達の観念」と題した部分ですでに使用した言葉である。そこで中内は，近世までの日本人は「教」という文字をめぐる世界にあまり関心をもたず，教授法的教育観ではなく，まさに「学習法的教育観こそみずからにふさわしいものとして展開してきていたのではなかったか」と述べている（同書，70頁）。しかし，江森はこのことについて『「勉強」時代の幕あけ—子どもと教師の近世史』の中では言及していない。

- 一方、この論文の初出である『教育学研究』（日本教育学会、45巻1号、1978年3月）の中では、一部の教育学者が前近代日本の教育観として「学習法」的教育観とか、「学習法」的発想という形で特徴付けているとして、中内の研究に言及している。
- 19 『大和俗訓』と『和俗童子訓』とでは、語りかけられる対象が異なるのであるが、それは両者の構成からも明らかに知られる。全八巻よりなる『大和俗訓』の内容は、巻一・二が「為学」（上・下）、巻三・四が「心術」（上・下）、巻五が「衣服・言語」、巻六・七が「躬行」（上・下）、巻八が「応接」となっており、「自己抑制を強調する益軒独自の思想にもとづく道德論が総論的に説かれている」（子安宣邦監修『日本思想史辞典』ペリかん社、2001年、554頁）。これに対して、全五巻より成る『和俗童子訓』は、巻一・二が「総論」（上・下）、巻三が「随年教法」「読書法」、巻四が「手習法」、巻五が「教女子法」である。
- 20 松田道雄は『日本式育児法』（講談社、1973年）において、益軒の『和俗童子訓』は幼児教育を書いた古典としてほとんど唯一の書であり、日本民族がやってきた体験はこの本によってしか学問として語られていないのであり、当時の日本の最良の家庭がどのように幼児を育てたかを伝えていると述べている（194頁）。
- 21 「慶安の触書」（児玉幸多編『近世農政史料集』吉川弘文館、1966年、40頁）。この文言は17世紀の半ばに幕府が提示した「諸国郷村江被仰出」の末尾において自ら宣言したもので、「脇よりおさへ取る者もこれ無し」という天下泰平を公言し、農民に対し年貢の皆済が生活を保証すると説くなかで、「能々身持ちをかせき可申もの也」と、生産への能動性を喚起し、安定した農業生産を営むとともに滞りなく年貢を納める農民の育成を意図したものであった。
- 22 仏教語の四恩については、「天地の恩・国王の恩・父母の恩・衆生の恩」や「父母・衆生・国王・三宝」など諸説があるが、茂睡のあげているのが最も普通に流布しているものの一つとされる。
- 23 『戸田茂睡全集』国書刊行会、昭和44年、191頁。
- 24 同上、200頁。
- 25 柴田純『思想史における近世』思文閣出版、1991年、10頁。
- 26 『翁問答』（『中江藤樹』日本思想大系29、岩波書店、79頁）。
- 27 子安宣邦『伊藤仁斎の世界』ペリかん社、2004年、18-21頁。
- 28 『童子問』岩波文庫、32頁。
- 29 『童子問』巻の上において仁斎は次のように述べている、「善を見ては則ち悦び、不善を見ては則ち嫉み、君子を見ては則ち之を貴び、小人を見ては則ち之を賤しむ。盜賊の至って不仁なると雖ども、亦然らずということ莫し。是れ教の由って入る所以なり」（『童子問』岩波文庫、36頁）。
- 30 同上、168頁。
- 31 同上、167頁。
- 32 同上、283頁（校注者 清水茂の解説）。
- 33 『町人囊』（『町人囊・百姓囊・長崎夜話草』岩波文庫、14頁）。
- 34 拙著『近世の国学と教育』多賀出版、1998年、94-96頁参照。
- 35 西川如見『町人囊』巻四（岩波文庫、79頁）。
- 36 如見は享保16年（1731）の『百姓囊』においてこの点に関し、次のように述べている。「百姓こころ有べき事也。兎角農家に生れたるを身の幸とおもひて、外にうつる心なく、身の程を楽しみなば、何の楽か是にしかなや。（中略）母の胎内を出て、則先啼ことを始めとす。啼ことは苦しめる事ありて也。笑ふ事は日数を経て後、始めて笑ふ。是人間苦を先として、楽を後とする、自然の道理にあらずや。此苦は天子もかはりなし。いはんや四民においておや。此理を辨ふるときは、苦と楽とへだてなし」（岩波文庫、195-196頁）。
- 37 『君子訓』序（『益軒全集』巻之三、390頁）。
- 38 同上。
- 39 『初学訓』巻二（『益軒全集』巻之三、14頁）。
- 40 辻本雅史『「学び」の復権』角川書店、1999年、89頁。
- 41 横山俊夫編『貝原益軒—天地和楽の文明学』平凡社、1995年、13頁。
- 42 『初学訓』巻二（『益軒全集』巻之三、15頁）。
- 43 注41に同じ。
- 44 『初学訓』巻二（『益軒全集』巻之三、14頁）。
- 45 立川昭二『江戸 老いの文化』筑摩書房、1996年、142-145頁。
- 46 『養生訓』巻第一（『益軒全集』巻之三、476-477頁）。
- 47 立川、注45に同じ。
- 48 『大和俗訓』巻之一、為学上（『益軒全集』巻之三、47-49頁）。
- 49 同上。
- 50 『家道訓』巻之四（『益軒全集』巻之三、452頁）。
- 51 益軒は『大和俗訓』においても、「上代よりこ

- のかた，誠は日々におとろへ，かざりは日々にかんかなり。おごりは弥まさり，儉約は弥すたる。質朴をばいやしみ，華美をばほむ。」（『益軒全集』卷之三，98頁）と述べている。
- 52 『家道訓』卷之四（『益軒全集』卷之三，452頁）。
- 53 塚本昭「儉約と養生」（横山俊夫編『貝原益軒一天地和楽の文明学』10章参照）。
- 54 『益軒全集』卷之三，「黒田重時へ送る書」（年号不詳）732頁。横山俊夫編『貝原益軒一天地和楽の文明学』210頁参照。
- 55 同上書，727頁。
- 56 『益軒全集』卷之三，731頁。
- 57 同上，717頁。
- 58 『大和俗訓』（『益軒全集』卷之三，77頁）。
- 59 辻 哲夫「貝原益軒の学問と方法—『大和俗訓』における儒学と科学」（『思想』605号，1974年）。
- 60 伴蒿蹊『近世畸人伝』（『東洋文庫』）202，平凡社，23頁）。
- 61 辻前掲論文参照。
- 62 『大和本草』自序（『益軒全集』卷之六，2頁）。
- 63 『文訓』上（『益軒全集』卷之三，324頁）。
- 64 『五常訓』卷之二（『益軒全集』卷之三，257頁）。
- 65 八木清治「経験的実学の展開」（『儒学・国学・洋学』《日本の近世》13，中央公論社，1993年）。
- 66 同上，182頁。
- 67 源 前掲書（注13）。なお，同氏の『近世実学思想の研究』（創文社，1980年）も参照。本稿における経験的合理主義に関する理解は，この書によるものである。なお，源は，『徳川合理思想の系譜』では，「経験的合理主義」という用語を使っているが，後の『近世実学思想の研究』では，表現を改めて「経験主義的合理主義」としている。
- 68 同上，20頁。
- 69 『慎思録』卷之一（『益軒全集』卷之二，6－7頁）。言うまでもなく，「知を致す」とは，『大学』にいう，「其の意を誠にせんと欲する者は先ずその知を致（きわ）む。知を致むるは物に格（いた）るに在り」（『大学・中庸』岩波文庫）によるものであり，「窮理」は，『易経』周易説卦傳にいう，「理を窮め性を尽くして以て命に至る」（『易経』岩波文庫）によっている。
- 70 『大和俗訓』卷之一，為学上（『益軒全集』卷之三，益軒会編，国書刊行会復刻，47－49頁）。
- 71 『自娛集』卷之一（『益軒全集』卷之二，183頁）。
- 72 同上。
- 73 『大和本草』卷之一，凡例（『益軒全集』卷之六，13頁）。
- 74 辻哲夫，前掲論文。
- 75 辻本雅史「學術の成立—益軒の道德論と学問論」（横山俊夫編『貝原益軒一天地和楽の文明学』5章）。
- 76 『慎思録』卷之五（『益軒全集』卷之二，111頁）。益軒は『慎思録』のこの部分とほとんど同じ内容を『大和本草』にも集録している。このほかに『慎思録』卷之四には次のようにも述べている，「万物皆一理の中に生る。故に一理之内陰陽五行四時人物具る。天下豈理外の氣，理外の物，理外の事有らんや」（72頁）。
- 77 『慎思録』卷之一（『益軒全集』卷之二，10頁）。
- 78 辻哲夫，前掲論文。
- 79 同上，13頁。同じく『慎思録』卷之二（『益軒全集』卷之二，40頁）でも，天下の事物の理に通曉することに「楽」を見い出し，次のように述べている。「天下に満つるの事物衆多にして其の理亦，窮まり無し。学を為して逐一其の理に通曉することを得て而も疑ふべき無し。是人生一大快事，其の楽しきこと窮まり無かるべし」。
- 80 源了円『近世初期実学思想の研究』創文社，1980年，55頁。
- 81 同上，62頁。
- 82 実学概念の類型化については，井上久雄「近世封建社会における実学意識」（広島大学教育学研究会『教育科学』14号，柳原書店，1956年）による。
- 83 岡田武彦はこの点について，益軒が実学という言葉を使ったのは論語のいわゆる「人の為にする」名利の学に対し，いわゆる「己の為にする」修身の学を指していった場合であるが，実際は「有用の学」が実学ととらえられていたと指摘している（『貝原益軒の儒学と実学』『西南学院大学 文理論集』15卷1号，1974年）。
- 84 『君子訓』卷之上（『益軒全集』卷之三，392頁）。
- 85 『慎思録』卷之一（『益軒全集』卷之二，8頁）。
- 86 『大和俗訓』卷之一（『益軒全集』卷之三，59頁）。
- 87 同上卷之二，（『益軒全集』卷之三，71頁）